

副所長定例講座

「『歎異抄』思想の解明」第Ⅲ期・第4回（通算第24回）

第四章——浄土の慈悲（4）

加来 雄之

『歎異抄』第四章（加来試訳）

『歎異抄』第四章	加来試訳
<p>四 一</p> <p>①慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。</p> <p>②聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐむなり。</p> <p>③しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。</p> <p>④浄土の慈悲といふは、念佛していそぎ佛になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。</p> <p>⑤今生に、いかにいとをし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。</p> <p>⑥しかれば念仏まふすのみぞ、すえとをりたる大慈悲心にてさふらうべきと</p> <p>⑦云々。</p>	<p>第四章</p> <p>【主題の提示】</p> <p>①慈悲には、〔自力〕聖道〔門の立場から、他力〕浄土〔門の立場へ〕の<u>変わりめ</u>があります。</p> <p>【「聖道の慈悲」について】</p> <p>②聖道〔門〕の慈悲というのは、〔この現世で自力によって〕人を、あわれみ、可愛がり、はぐくみ育てていこうとすることです。</p> <p>③けれども、思いのままに助けとげるということは、きわめて実現が難しいのです。</p> <p>【「浄土の慈悲」について】</p> <p>④浄土〔門〕の慈悲というのは、念仏して、<u>いそぎ</u>仏となって、大いなる慈と大いなる悲の心によって、思うがままに生きとし生けるものを利益することを<u>いはずな</u>です。</p> <p>【「かわりめあり」について】</p> <p>⑤今の〔迷いの〕生にあっては、どんなにいとおいしいと思ひ、<u>不便だ</u>と思ってみても、<u>自分の意のままに助けることはできないので、このような慈悲は始めも終わりもないのだ。</u></p> <p>⑥そうしてみると、念仏もうすことだけが、最後まで徹底した大いなる慈悲の心で<u>ありましよう</u>、</p> <p>⑦と〔故親鸞聖人は〕教えてくださいました。</p>

I 前回までの振り返り

- ・『歎異抄』師訓篇における第四章の地位——前三章をうけて。他者への関わり方。
- ・「聖道の慈悲」と「浄土の慈悲」との対比

②聖道の慈悲といふは、 ものをあはれみ、かなしみ、はぐむなり。	④浄土の慈悲といふは、 念佛していそぎ佛になりて、 大慈大悲心をもて、
③しかれども、 <u>おもふがごとくたすけとぐる</u> こと、きはめてありがたし。	<u>おもふがごとく衆生を利益するをいふ</u> べきなり。

II 浄土の慈悲について

⑤「浄土の慈悲といふは……をいふべきなり」

「浄土の慈悲といふは、」

・浄土〔門〕という関心（一生造悪、煩惱具足のわれら）における慈悲（他者への関わり方）の問題とはなにか。『歎異抄』では、第三章までで「浄土」はどのように確かめられてきたか。

「念仏していそぎ仏になりて」

・「念仏していそぎ仏になりて」とはどのようなあり方なのか。なぜこのことが問題となるのか。→『歎異抄』に「いそぎ〔浄土の〕さとりをひらきなば」（『歎異抄』第五章）
「またいそぎ浄土へまひりたきこころのさふらはぬは」（『歎異抄』第九章）

・「いそぎ佛になりて」とはどういうことか。とくに法然の「夫速離生死」などと表現でたずねられてきた一課題との関係。「本願を信じ念仏をまふさば仏になる」（『歎異抄』第十二章）、急ぎ仏に成るとは、仏が仏になり凡夫が凡夫となる事実を表現する。凡夫として仏を証明すること。

・行巻に引用される法照『浄土五会念仏略法事儀讃』「阿弥陀経に依る」のなかに出る「急要」の語について。

五濁の修行は、多く退転す。念仏して西方に往くには如かず。／彼に到れば自然に正覚を成る。苦界に還来りて津梁と作らん。／万行の中に**急要**とす。迅速なること、浄土門に過ぎたるは無し。」

（行巻引用。『浄土五会念仏略法事儀讃』『聖典』（第2版）197頁）

・「念仏していそぎ仏になる」と「撰取不捨の利益にあずけしめたまふ」（第一章）との関係。第一章の「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつこころのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり。」（『歎異抄』第一章『聖典』（第2版）767頁）によれば、「念仏する」とは「すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたまう」という利益を実現する。

「大慈大悲心をもて」

・「大慈大悲心をもて」というときの「大慈大悲心」とはなにか。——三縁の慈悲の中の無縁の慈悲の心——如来の心——ここの④の「大慈大悲心」と⑥の「大慈悲心」との表現の異なりをどう考えるか。→如来には大慈と大悲という二つの課題があることを明示するために分けて表記する。浄土に生まれて浄土に生きる。他者へのかかわりは大悲がはっきりしなければならぬ。

・「大慈大悲心」の用例。

この信樂は、仏にならんとねがうともうすところなり。この願作仏心は、すなわち度衆生心なり。この度衆生心ともうすは、すなわち衆生をして生死の大海をわたすところなり。この信樂は、衆生をして無上涅槃にいたらしむる心なり。この心すなわち大菩提心なり。大慈大悲心なり。この信心すなわち仏性なり。すなわち如来なり。

(『唯信鈔文意』『聖典』(第2版)681頁)

・『観無量寿経』

此の事を見れば、即ち十方一切の諸仏を見たてまつる。諸仏を見たてまつるを以ての故に「念仏三昧」と名づく。是の観を作すをば、「一切の仏身を観ず」と名づく。仏身を観ずるを以ての故に、亦仏心を見る。仏心というは大慈悲是れなり。無縁の慈を以て諸の衆生を摂す。」(『観無量寿経』第九真身観『聖典』(第2版)115頁)

・この「大慈悲」を「大慈」と「大悲」と分けて表現する意味はなにか。

①『涅槃経』に言わく(師子吼菩薩品)、「善男子。大慈大悲を名づけて「仏性」とす。何を以ての故に。大慈大悲は常に菩薩に随うこと、影の形に随うが如し。一切衆生、畢に定んで当に大慈大悲を得べし。是の故に説きて「一切衆生悉有仏性」と言えるなり。大慈大悲は名づけて「仏性」とす。仏性は名づけて「如来」とす。

(『教行信証』信巻引用『涅槃経』『聖典』(第2版)260頁)

②往相回向の大慈より 還相回向の大悲をう

如来の回向なかりせば 浄土の菩提はいかがせむ

(『正像末和讃』『聖典』(第2版)616頁)

③仏智不思議をうたがいて 善本徳本たのむひと

辺地憊慢にうまるれば 大慈大悲はえざりけり

(『正像末和讃』『聖典』(第2版)618頁)

・小慈小悲

小慈小悲もなき身にて 有情利益はおもうまじ

如来の願船いまさずは 苦海をいかでかわたるべき

(『正像末和讃』愚禿悲歎述懐『聖典』(第2版)622-623頁)

よしあしの文字をもしらぬひとはみな まことのこころなりけるを

善悪の字しりがおは おおそらごとのかたちなり

是非しらず邪正もわかぬ このみなり

小慈小悲もなけれども 名利に人師をこのむなり

(『正像末和讃』『聖典』(第2版)626頁)

「おもうがごとく衆生を利益する」

・聖道の慈悲の「おもうがごとく」は修行者の「ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむ」という思いであり、浄土の慈悲の「おもうがごとく」は如来の「大慈大悲心をもて衆生を利益する」というおもいである。——「はからい」に二種あることが『歎異抄』第十一章に次のように出ている。「まず弥陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて、生死をいずべしと信じて、念仏のもうさるるも、如来の御はからいなりとおもえば、すこしもみずからはからいまじわらざるがゆえに、本願に相応して、実報土に往生するなり。」(『歎異抄』第十一章、『聖典』(第2版)772頁)

・聖道の慈悲の「ものを……たすけとぐる」と浄土の慈悲の「衆生を利益する」という表現の異なりについて。「聖道の慈悲」の「たすくとぐる」は、衆生と衆生との関係。「浄土の慈悲」の「衆生を利益する」は如来と衆生との関係。なぜ「もの」でなく「衆生」でなくてはならないのか。第五章では「一切の有情」として表現される。

・「利益する」とはどのようなことか。

『歎異抄』では「利益する」とは、「摂取不捨の利益にあずけしめたまふ」という人生の意味を与えることである。——これが私たちの人世(たとえば戦争という悲惨な状況)にとってどのような意味をもつのでしょうか。——「それでも人生にイエスという」智慧のはたらきに参与させられること。

・前回の問いに答えて——「タスク」と「スクフ」¹

「をいうべきなり」

この「べき」は、現状を経験・道理などから判断して、そういうことになるにちがいない

¹ 【補説】真宗の「救済」には、「タスク」と「スクフ」という二つの意味がある。

「斯れ乃ち権化の仁、齋しく苦悩の群萌を救(タスケ)濟(スクウ)し、世雄の悲、正しく逆謗闡提を恵まんと欲す。」(『教行信証』総序)

・「救済〔苦悩群萌〕」と「欲恵〔逆謗闡提〕」

・「タスク」と「スクフ」

└「タスク」 回向 衆生に仏道(往還二回向)を与える。

└「スクフ」 摂化 衆生を仏土に生まれさせ、光明によって包む。

・『皇太子聖徳奉讃』(七十五首)における「救済」の左訓を手がかりに

「日本国帰命聖徳太子／仏法弘興の恩ふかし〈ヒロクヒロメタマフト〉／有情救済〈タスケスクワセタマフト〉の慈悲ひろし／奉讃不退ならしめよ〈ホメタテマツルコトオコタラザレトナリ〉」(第一首、『浄典全二』五三七頁、)

「太子の崩御のそのゝちに〈ウセサセタマフヲホウギヨトマフスナリ〉／有情を救済せむ〈スクヒタスクルナリ〉ひとは／太子の御身と礼すべし」(第三十五首、五四二頁)

「長者卑賤のみとなりて〈イヤシキモノトナリ〉／経論・仏像興隆し／比丘・比丘尼とむまれても／有缘の有情を救済せむ〈タスケスクワントナリ〉」(第五十四首、五四五頁)

・まず「利益」と「救済」は同義ではありません、「利益」には「スクフ」という左訓はない。

という意味をあらわす助動詞「べし」。

どうして「利益すべきなり」といわずに、「利益するをいうべきなり」と表現するのか。——安良岡は「「……をいふべきなり」と言い切っている所に、親鸞の把持している信念の強さが認められる」（安良岡一二三頁）と解している。

「そういうことなるにちがいない」というニュアンスは、その利益が、信心の行者における当益についての言説であるからだろうか。考えてみたい。「いうべきなり」表現は、次の話題へと展開させる。

Ⅲ 「かわりめあり」について

⑤「今生にいかに……この慈悲始終なし」

⑥「しかれば念仏まふすのみぞ……大慈悲心にてさふらうべき」

<p>⑤今生に、いかにいとをし不便とおもふとも、存知のごとくたすげがたければ、この慈悲始終なし。</p> <p>⑥しかれば念仏まふすのみぞ、すえとをりたる大慈悲心にてさふらうべき</p>	<p>⑤今の〔迷いの〕生にあっては、どんなにいとおいしいと思ひ、不便だと思つてみても、<u>自分の意のままに助けることはできないので、このような慈悲は始めも終わりもないのだ。</u></p> <p>⑥そうしてみると、念仏もうすことだけが、最後まで徹底した大いなる慈悲の心で<u>ありましよう。</u></p>
---	--

・この段落は第一段に示された主題のうちの「かわりめあり」という表現を説き明かすのではないか。

⑤「今生に……この慈悲始終なし」

・「今生に」……「今生」と「来生」との対比。「来生」は死後ではなく、浄土に生まれることである。「今生」と「現生」とのニュアンスの差。「来生」とはなにか。

・「存知のごとく」……『歎異抄』における「存知せず」の用例からいうと否定的意味である。

・「この慈悲」とは何か。

「この慈悲」は、聖道の慈悲のことではなく、直前の「今生にいかにいとをし不便とおもへども」とある内容をさす（佐藤正英、安良岡康作）。では「今生にいかにいとをし不便とおもへども」という慈悲とはどのような立場か。

聖道の慈悲を指す。ならば「始終なし」は貫徹しないの意。

浄土の慈悲を指す。ならば「始終なし」は終わりが無いの意。

聖道の慈悲から浄土の慈悲への「かわりめ」を指す。

・「始終なし」—「始終」については、『西方指南抄』上本に「道綽禪師、念佛の衆生において始終兩益ありと釋したまへる。」とある。その場合は始益としての摂取不捨の利益と終益としての浄土に生まれて阿弥陀仏に見える利益がないことになる。

一般に、「始終」は、「①はじめとおわり。②始めから終りまで。すべて。「一部—」③最後。結末。将来。……④(副詞的に用いて)①たえず。常に。……②(「始」は添語)結局。ついには。」（『広辞苑』）

⑥「しかれば念仏もうすのみぞすえとおりたる大慈悲心にてそうろうべき

- ・「しかれば」は、「爾者」か「然者」か。→「然れば」は、順接逆接を含め話題を転回する。
- ・「念仏もうすのみぞ」……「念仏のみぞ」ではなく、「念仏もうすのみぞ」と表現される意味。「もうすことだけが」と「もうす」ことが強調される意味はなにか。慈悲において「もうす」という実践の意味はなにか。→「もうす」は言葉として表現するという実践を意味するのではないか。

藤秀翠は、ここの「念仏もうすのみぞ」を第一章の「念仏もうさんとおもいたつところ」、第二章の「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」に関係づけて、

(1) 如来の大心にいよいよ深く帰入するところであり、

(2) 如来の大心を背負うて現実界に出でんとするところである

と理解している（『講讃』）。

- ・「すえとおりたる」……最後まで徹底する。

参考→『往生礼讃』「彼の国に到り已りて六神通を得、生死に廻入して衆生を教化し、後際を徹窮して心に厭足なく、乃ち成仏に至るを亦廻向門と名づく」

- ・「大慈悲心にてさふらうべき」

「にて」

「さふらうべき」

「べき」は推量の助動詞によってやや婉曲に言っていることについて安良岡は「将来における往生や成仏や還相としての衆生済度に関わっているから」（安良岡 123）という。

「大慈悲心」

真実信心即ち是れ金剛心なり。金剛心即ち是れ願作仏心なり。願作仏心即ち是れ度衆生心なり。度衆生心即ち是れ衆生を攝取して安楽浄土に生ぜしむる心なり。是の心即ち是れ大菩提心なり。是の心即ち是れ大慈悲心なり。是の心即ち是れ無量光明慧に由りて生ずるが故に。願海平等なるが故に発心等し。発心等しきが故に道等し。道等しきが故に大慈悲等し。大慈悲は是れ仏道の正因なるが故に。

（『教行信証』信卷、『聖典』（第2版）274頁）

- ・⑥をどのように訳せばよいのか。

(ア)「そうであれば〔私たちが〕念仏もうすことだけが、〔私たちの〕最後まで徹底する広大な慈悲の心〔の実践〕であるはずである」

と訳すか、もしくは

(イ)「そうであれば〔私たちにとっては〕念仏もうすことだけが、最後まで徹底する〔如来の〕広大な慈悲の心〔にかなうこと〕であるはずである」

と訳すか。(イ)はどこまでも慈悲の主体を如来に見る解釈。

【参考】

(21) 如来の回向に帰入して 願作仏心うるひとは
自力の回向をすてはてて 利益有情はきわもなし

(『正像末和讃』 『聖典』 (第2版) 612頁)

・ここにいう「如来の回向」は「往相回向の大慈・還相回向の大悲」である。「如来の回向に帰入して」「自力の回向をすてはて」ることによって「利益有情はきわもない」という「きわもない」が「すえとおりたる」という意味であろうか。

⑦「と云々」について

⑦と云々。	⑦と〔故親鸞聖人は〕教えていただきました。
-------	-----------------------

おわりに

=====